ISSN 1884-7730

安曇野ちひろ美術館
美術館だより

No.114
2024.5.27

いわさきちひろ ぼつご50ねん　こどものみなさまへ　みんな　なかまよ

2024年６月８日（土）～９月１日（日）

主催：ちひろ美術館　協力：谷川俊太郎　講談社　後援：絵本学会、（公社）全国学校図書館協議会、（一社）日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、信濃毎日新聞社、市民タイムス、ａｂｎ長野朝日放送、長野エフエム放送株式会社

グラフィックデザイン　岡崎智弘

企画協力　塩瀬隆之（京都大学准教授／システム工学、インクルーシブデザイン）

日本科学未来館ロボット展リニューアルで問いの監修、徳島県立博物館リニューアルでインクルーシブデザインの観点から監修するなど、多様な人を深い学びに誘う「問い」のデザインを探究し続けている。

※インクルーシブデザインとは、障害のある人や高齢者など特定のニーズをもった人々を、製品や公共空間のデザインなどに書き込んでいくデザイン手法です。

「平和のはんたい」を考えるとしたら、みなさんはどんなことばを思い浮かべますか。もし「戦争」や「争い」といったことばを使わないとしたら、どんなことばを頼りにしますか。いわさきちひろにとって、心を痛めたであろう戦争について直接扱った作品は多くはなく、それ以上にただ子どもを描き続けたのです。「子どもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおんなじ」。子どもの絵本を描いてきたちひろならではのこの視点こそ、本企画で平和と向き合う拠り所です。何か人生のかなしいときや、絶望的になったときに、その絵本のやさしい世界をちょっとでも思いだしてほしいというちひろの声が、平和に向き合うわたしたちの力になると信じて。

いわさきちひろが願った平和

「『みんな仲間よ』私は自分の心にいいきかせて、なつかしい、やさしい、人の心のふる里をさがします。絵本の中にそれがちゃんとしまってあるのです。」

いわさきちひろ　1972年

このことばは、いわさきちひろが、自身の絵本に寄せてつづったものです。ちひろは、生涯で40冊あまりの絵本を手がけていますが、1968年から亡くなる前年まで、毎年１冊ずつ計６冊の絵本シリーズに取り組みました。これらの絵本には、子どもの心の動きがいきいきととらえられています。その３作目となる『となりにきたこ』では、ひとりの少女が、となりに引っ越してきた同じ年頃の少年と出会い、心の葛藤を越えて、仲良くなるまでのようすが描かれています（図１）。この絵本には、わたしたちが争いを退け、平和をつくるためのヒントがかくされているようです。ちひろが亡くなって50年の節目を迎える今、改めてちひろが絵本を通して子どもたちに手渡そうとした平和を見つめ直したいと思います。

戦争の対義語ではない平和

本展では、子どもから大人まで、みんなでちひろの絵と絵本を通して平和について考え、平和を築く手がかりを探ります。本展の企画にあたり、塩瀬隆之氏から「戦争」の対義語ではない「平和」について考えるという視点が提案されました。平和とはどのような状態のことをいうのでしょうか。改めて考えるために、展示室のなかだけでなく、館内にいくつもの「問い」を掲げます。例えば、「へいわ　の　はんたいは　なに？」……。みなさんは、どのようなことばを思い浮かべましたか。答えはひとつではありません。人それぞれ異なる考えがあらわれてくるでしょう。

ちひろはあらゆる子どもの姿を描いています。ひとりもの思いにふける子もいれば（図２）、ことばを交わすふたりの子どもや、３人以上で集う子どもたちの姿も描いています。そこには、ひとりでいることの充足や子ども同士の交流を見て取ることができます。平和は、ひとりから始まるのでしょうか？　それとも、ふたりから？

戦火のなかの子どもたち

ちひろが最後に仕上げた絵本は『戦火のなかの子どもたち』です。ちひろは、この絵本で、それまでに決して描いたことのなかった心を閉ざした子どもの姿を

図１　垣根ごしにのぞく子ども『となりにきたこ』（至光社）より　1970年

図２　貝がらと少年　1967年

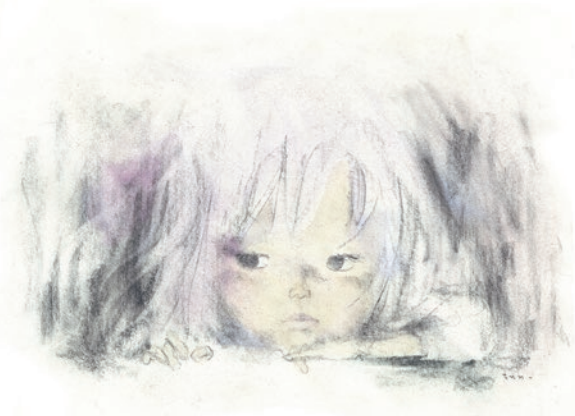


図３　戦火のなかの少女『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）より　1972年

描いています（図３）。わたしたちは、平和を願うこと以外になにができるでしょうか。

絵本『ひとりひとり』

『ひとりひとり』は、谷川俊太郎の詩とちひろの絵を重ねた絵本です（図４）。新型コロナウイルスの蔓延により、さまざまな行動が制限されるなか、2020年に出版されました。この絵本を起点として、わたしたちが関係をつくることの難しさと、ひとりひとりがともにこの世界にいることの豊かさについて考えます。

ともに楽しむ

ちひろ没後50年の展覧会全体のディレクションをつとめているのは、アートユニット plaplax です。彼らは本展で、来場者が作品に参加することができるインタラクティブな新作を２点展示します。《だぁ・いー・あ！ローグ》（図５）では、テーブルのうえに設置してあるマイクに向かって声を出すと、声の高さや大きさによって、ちひろが好んで描いていたパステルの線や水彩絵の具のにじみがあらわれます。ほかの人の線や色ときれいにまざりあうこともあれば、はじきあうこともあるでしょう。もうひとつの新作《スー　ぽん　タン　しーん》では、木製のオブジェをたたいたり、なでたりすると、スクリーンにさまざまな音とともにちひろの絵や水彩の色があらわれます。みんなで即興の「合奏」をして、ちひろの絵の世界を音とともに楽しむことができます。　（原島　恵）

ひとりひとり

ひとりひとり　違う目と鼻と口をもち
ひとりひとり　同じ青空を見上げる
ひとりひとり　違う顔と名前をもち
ひとりひとり　よく似たため息をつく

ひとりひとり　違う小さな物語を生きて
ひとりひとり　大きな物語に呑みこまれる
ひとりひとり　ひとりぼっちで考えている
ひとりひとり　ひとりでいたくないと

ひとりひとり　簡単にふたりにならない
ひとりひとり　だから手がつなげる
ひとりひとり　たがいに出会うとき
ひとりひとり　それぞれの自分を見つける

ひとりひとり　ひとり始まる明日は
ひとりひとり　違う昨日から生まれる
ひとりひとり　違う夢の話をして
ひとりひとり　いっしょに笑う

ひとりひとり　どんなに違っていても
ひとりひとり　ふるさとは同じこの地球

谷川俊太郎　2009年

図４　『ひとりひとり』（講談社）　2020年

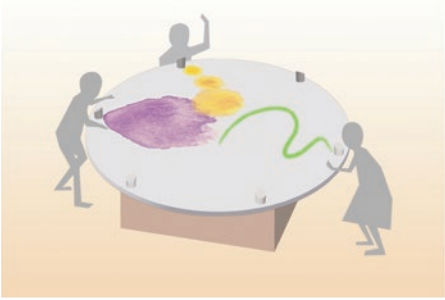


図５　plaplax だぁ・いー・あ！ローグ　イメージスケッチ　2024年

ちひろ美術館コレクションに見る「平和」

●2024年6月8日(土)～9月1日(日)

主催：ちひろ美術館

今回は「みんな なかまよ」展に関連して、ちひろ美術館コレクションから「平和」をテーマに、世界の絵本画家たちの作品を展示します。

アルゼンチンの絵本画家、クラウディア・レニャッツィの『わたしの家』（図１）は、主人公の小さな家が世界を旅する物語。軍の独裁政権下に育ち、服装や髪型までもが取り締まりの対象だったというなかで、レニャッツィはいつも空想の世界に遊んでいたといいます。旅する家は彼女自身の心の象徴であり、誰も心にある思いを侵略することはできない、想像力があればどこにでも行けるという、画家の思いが込められています。装甲車のキャタピラ部分には凹凸を生かしたダンボール、草原には植物の繊維など、画面にさまざまな素材を貼り付けるコラージュの手法が使われています。

図１　クラウディア・レニャッツィ（アルゼンチン）
『わたしの家』より　2001年

「つぼのおうち」（図２）は、旧ソビエト時代に絵本画家として活躍したエフゲーニー・ラチョフが描いたもので、ウクライナ民話を題材にした彼の代表作『てぶくろ』によく似たお話です。ウクライナやロシアの民話には、動物の姿を借りて人間の本質や社会を風刺した寓話が数多くあります。オオカミは獰猛で、地主や領主、高官など人々を弾圧する側のイメージと結びつくのに対して、ウサギは小心者で罪のない民衆の姿と重なります。ラチョフは動物に民族衣装を着せることで、登場人物の立場や階級、性格などを巧みに表現し、いつの時代にも通ずる人間の本性をユーモラスに描き出しました。

図２　エフゲーニー・ラチョフ（ロシア）
ロシア民話「つぼのおうち」　1959年

時代や国境を越えて、争いのない社会や平和への思いが感じられる絵本画家たちの作品のほか、絵本の歴史的な資料などを紹介した常設コーナーもあわせてご覧ください。　（山田実穂）

2024年３月18日（月）　スージー・リー講演会「物語はあなたにあり」

共催：松川村図書館　協力：(一社)日本国際児童図書評議会　通訳・申明浩

韓国の絵本画家スージー・リーさんによる講演会を開催しました。スージー・リーさんは、2022年に国際アンデルセン賞画家賞を韓国で初めて受賞し、韓国の絵本の概念の変革者ともいわれます。講演会の一部を紹介します。（船本裕子）

ちひろとの出会い

子どものころ、祖母の家に遊びに行くと、日本の雑誌や絵本をいっしょによく見ていました。植民地時代の影響で、祖母は日本語が話せたんです。美しいものが好きだった祖母は、雑誌をスクラップして大切にしていました。当時のことを思うと浮かんでくるのがちひろの絵です。子どもの自分と重なるところがあったからでしょうか。ちひろが描く子どもの奥深く輝くひとみがとても心に残っています。アトリエの壁には、わたしが描いたちひろの子どもの絵が貼ってあります。ちひろの絵をみると頭が大きい。体が細くて、それよりもっと細いのが足というイメージです。わたしが子どもを描くとき、わたしは、より元気に太い腕と足を描きますが、わたしが描く子どものイメージの原形として、この絵を見て、考えたりしながら描いています。

絵本『なみ』について

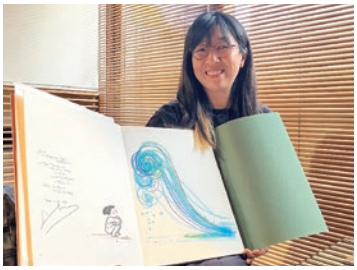
絵本『なみ』は、文字のない絵本です。世界16ヵ国で出版されているんですが、いろんな国の子どもたちが、自分でつくった物語を絵本のページに書きこんで、その写真を送ってくれます。

わたしの絵本には、余白がたくさんあるので、子どもたちは、それに耐えきれず、ことばを書き入れるんじゃないかと思います。自分の物語をつくってあげようという意思も表れています。子どもが書いた文字も美しいし、子どもが書いたことばもとてもきれいだと思います。子どもたちは絵を見るだけでなく、絵を読むんですね。絵のなかにどんどん入っていって、そのなかで、自分の感情で物語と出会う。そんな感じではないかと思います。それが文字のない絵本の魅力でもあると思います。

絵本『なみ』（講談社）より2009年

絵本づくりについて

わたしは「ヒントキプレス」という出版社を立ち上げて、他の出版社では、絶対に出してくれないような、実験的な作品もつくっています。カード型の絵本もそうです。一枚一枚に、韓国の昔話が描かれていて、集めたカードの組み合わせによって、物語が変化します。ベートーヴェンの楽譜を見たのをきっかけに音楽をテーマにした絵本をつくりました。絵本「夏が来た」では、ヴィヴァルディの四季の第二曲「夏」を描きました。ＱＲコードを読み込むと音楽が流れます。わたしは絵本がひとつの舞台であると思っています。ページをめくるとカーテンが上がり、ドラマが始まります。最後のページをめくるとカーテンが下ります。それから本棚にしまいますよね。そして、絵本を取り出すと、またいつでも舞台を広げることができる。このように、すごく広い世界をひとつの小さなところに圧縮させて、閉じ込めたのが絵本です。このようなすてきな世界をみなさんといっしょに共有することができて、とてもうれしいです。



当館のゲストブックへのメッセージ

「いつもちひろの絵の世界が気になっていました。今、このように直接絵にふれ、細やかな話を耳にし、そのなかに入ることができてうれしいです。ずっと好奇心を持とう。ちひろの子どものように。スージー・リー　2024.3.18」

ひとこと ふたこと みこと

3月22日（金）
三重県から来ました。自然がいっぱいで、雪もまだあって感動しました。まだまだ楽しみたいです。子どものころの感性を思い出し、心が豊かになりました。

3月22日（金）
昨年末トットちゃんの映画を観て、ここに来たくなりました。この物語を、次の世代に伝えていくことが大切だと感じました。もうすぐ産まれるあかちゃんが大きくなったら、またここに来たいです。いっしょに絵本を見たいです。

3月28日（木）
駐輪場からの小さな林の小道に胸が躍りました。原画を拝見し、なんてやさしい絵なんだろうと思いました。これ以上やさしい目を、私は見たことがありません。（中略）『もしもしおでんわ』を、寝入った子の寝顔を見ながら、子ども３人に読みきかせしました。今は３人とも成人して、ふつうに大きくなりました。この子たちのはじめての絵本がちひろの絵でよかった。ちひろさん、ありがとうございました。　（山下クミノ）

3月28日（木）
毎年３月に来ており、今回で９回目です。子ども好きではありませんが、ちひろさんを通して見ると、子どもたちが愛しくて胸がギュッとなります。今日は、今まで来たなかで人が１番多かったです。子どもたちも多くて、「こどものみなさまへ　あ・そ・ぼ」で楽しそうにしているのを見たら、私も幸せな気持ちになりました。いつまでも平和な世で、子どもたちが生きられますように。（東京都　A.S）

3月29日（金）
白抜きで天使を描いたり、強い線ではっきりとあらわしたりしない絵。余白があり、見る人の心もちにゆだねられ、想像力をかきたてられます。なんでもすべて明らかに主張しない現代の風潮とはまた違う、曖昧なうちにある世界に、「あそび」のある空気を感じました。そんな空気に出会える、特別な絵の力があると感じます。（S）

3月30日（土）
冬休みに孫たちを映画に連れていき、春休みの今日、孫たちと美術館に来ました。来館は２回目ですが、トットちゃんの映画で観た、いろいろなものが現物化されていて、子どもたちはとても楽しんでいました。

美術館日記

3月1日（金）
ミュージアムショップの有料買物袋にマチ付き手提げ紙袋が新登場。Gペンやわりばしを削ってつくるわりばしペンを使って、インクで描いたちひろのカットが、未晒（みざらし）クラフト紙に配置されたシックなデザイン。お客さまにも好評。

3月14日（木）
「楽しい！」「僕は色をつくる名人だ！」アートユニット･plaplaxの作品≪絵の具の足あと≫であそぶ地元松川北保育園の子どもたちの声が展示室に響く。≪絵を見るための遊具≫を並んでのぞいたり、くぐったり、登ったりして「おもしろい！」と大満足。

3月24日（日）
長野県民感謝デーと「花咲まつりin安曇野ちひろ公園」が開催された。県民の入館者は1100人以上。公園では、ちひろの絵「海を見つめる少女」をイメージして、パンジーで地上絵を制作。前日の降雪で、うっすら積る雪のキャンバスに色とりどりの花で描かれた絵が映える。蟻ケ崎高校書道部によるパフォーマンスなども披露され、会場が盛り上がった。

4月10日（水）
救急救命講習と消防訓練を実施。視覚・聴覚障害者、車いす使用者、外国人観光客を想定し、アイマスクや耳栓、日本語と英語で「火事です！ FIRE ！」などが書かれたフリップボードを用意。どんなお客様も安全に避難誘導できるよう、真剣に訓練を行う。

4月24日（水）
この秋開催の展覧会「あれ　これ　いのち」に関連し、生態学者の鷲谷いづみ氏と美術館スタッフの有志が、春の野と秋の野をイメージして、フキ、ワラビ、サクラソウ、秋の七草などの草花を100株以上定植。50㎡の中庭は、自然との共生をテーマに「共生の庭」と名付けられた。ちひろが絵を描いていた半世紀前は当たり前にあった野の花が、気候変動や外来種の影響もあり、少なくなっている。鷲谷氏は「野だったところが人口林になるなどして、身近だった植物が遠い存在になった。ちひろの絵とともに実物も見てほしい」と話す。

新収蔵作品紹介⑧

いわさきちひろ

『童謡絵本』（小学館）など　1958年～1962年

昨年、小学館で発見されたいわさきちひろの原画が、新たに収蔵されました。1950年代後半から1960年代初めに、『童謡絵本』や『みんなのどうよう』などに掲載された５点です。

そのなかに、母子像を描いた作品が２点あります。「ねむれ　ねむれ、ははの　むねに」ではじまる内藤濯（ないとうあらう）の訳詞による「シューベルトの子守歌」（図１）では、母親に抱かれて眠るあかちゃんを描いています。産着に包まれた子どもをやさしく抱く母親には、息子を持つ母だったちひろ自身の姿が重なります。

「かあさま　かあさま　たかいたかい　してよ」と歌う与田準一の童謡「たかい　たかい」（図２）では、両手を上げた女の子を抱き上げる母親を描いています。背景には、海や船、カラフルな屋根の家々など、少女が見たいと願う風景が広がっています。

他にも、巽聖歌（たつみせいか）の「たきび」や百田宗治（ももたそうじ）の「どこかで　はるが」、高野辰之の「はるの　おがわ」といった、今も歌い継がれる童謡に絵を描いています。画面の隅々まで丁寧に描き込み、色数を使った華やかな配色が目を引く新収蔵作品には、絵雑誌の仕事を主軸にしていた時代の画風の特徴を見ることができます。今後の展覧会で紹介する予定です。（宍倉恵美子）

図１　「しゅうべるとの　こもりうた」
『童謡絵本　名作童謡集』（小学館）より　1958年

図２　『たかい　たかい』
『幼児絵本　みんなのどうよう』より　1962年

INFORMATION

●次回展覧会予定　2024年9月7日(土)～12月1日(日)

いわさきちひろ ぼつご50ねん　こどものみなさまへ　あれ これ いのち

いわさきちひろ　秋の花と子どもたち　1965年

いわさきちひろが絵を描いていた50年以上前、日本は高度成長期のまっただなかでした。開発の名のもと、それまで見られた草花や生きものも減っていきました。ちひろは絵のなかに、当時、身近にあった野の草花や生きものの姿を描いています。
本展は、生態学の視点やアートユニット plaplax によるインタラクティブな作品を取り入れ、ちひろの絵を通して、いろいろな「いのち」となかよく生きるにはどうしたらよいかを楽しく考える展覧会です。

安曇野ちひろ美術館　イベント予定　各イベントの予約･お問い合わせは､安曇野ちひろ美術館へ。

下記イベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性がございます。最新情報につきましては、公式サイトをご覧いただくか、お電話にてお問合せ下さい。
TEL.0261-62-0772　chihiro.jp

〈展覧会関連イベント〉

●近森基(plaplax)×塩瀬隆之による オープニングギャラリートーク

○日時：６月８日（土）10：30～11：30
○参加費：無料（入館料別）
○定員：20名（先着）　○申し込み：不要
開催中の展覧会「みんな　なかまよ」の展覧会ディレクター近森基（plaplax）と企画協力者の塩瀬隆之（京都大学准教授）による、スペシャルなギャラリートークです。

plaplax あそぼ広場の遊具　2024年

●親子で楽しむギャラリーツアー

○日時：７月７日（日）11：00～12：00
○参加費：無料（入館料別）
○定員：親子10組
○対象：小学生と保護者
○申し込み:要事前予約(公式サイト／TEL.にて)
開催中の展覧会「みんな なかまよ」の作品鑑賞ツアーを親子でいっしょに楽しみましょう。

〈会期中のイベント〉

●ギャラリートーク

○日時：毎月第３土曜日　14：00～14：30
○参加費：無料(入館料別)　○定員：20名(先着)　○申し込み：不要
開催中の展覧会「みんな なかまよ」の見どころを学芸員がわかりやすく解説します。

●絵本のじかん

○日時：毎月第１土曜日　11：30～12：00
○参加費：無料（入館料別）　○定員：20名（先着）
○申し込み：不要
季節や展示にあわせた絵本の読み聞かせを行います。

●ちいさなおはなしの会 at 絵本カフェ

○日時：６月16日（日）11：00～
○参加費：無料(入館料別)　○定員：20名(先着)　○申し込み：不要
絵本カフェにて絵本の読み聞かせを行います。

●ちひろ忌

○日時：８月８日（木）９：00～17：00
2024年８月８日、いわさきちひろ（1918～1974）がこの世を去って、50年目の夏を迎えます。
当日は、ちひろが生涯願い続けた世界中の子どもたちのしあわせと平和への思いをご来館のみなさまと分かち合う一日にします。この日ご来館の方に、ちひろのことばカードを差し上げます。

いわさきちひろ　新聞紙で遊ぶあかちゃん　1967年

松本猛近影

●ちひろ忌　松本猛ギャラリートーク

○日時：８月８日（木）14：00～14：30
○参加費：無料（入館料別）
○定員：20名（先着）　○申し込み：不要
ちひろのひとり息子である松本猛（ちひろ美術館・常任顧問）が、展覧会の見どころや母・ちひろとの思い出を話します。

●夜のミュージアム

○日時：８月17日（土）９：00～20：00
開館時間を延長して20時まで開館します。夕暮れどきからライトアップされた幻想的な夜の美術館（設計：内藤廣）で、ゆったりとした時間をお楽しみください。ちょっとこわいおはなしの会や、安曇野ちひろ公園で「トットちゃんの肝だめし」も開催します。
この日、浴衣でご来館の方には、絵本カフェのワンドリンクチケット or ショップ10% OFF チケットをプレゼントします（カフェは、19：00閉店）。

●中学生ボランティアがこの夏も活動します

地元松川村立松川中学校のボランティアが夏休み期間中に、展覧会のサポートや絵本の読み聞かせを行います。活動内容は、公式サイトをご覧ください。

●開館情報

○開館時間：10：00～17：00　※８月は９：00～17：00
○休館日：水曜日（祝休日は開館、翌平日休館）※８月は無休

CONTENTS

〈展示紹介〉いわさきちひろ　ぼつご50ねん　こどものみなさまへ　みんな なかまよ…❷❸／〈展示紹介〉ちひろ美術館コレクションに見る「平和」／〈活動報告〉スージー・リー講演会「物語はあなたにあり」…❹／ひとことふたことみこと／美術館日記／新収蔵作品紹介⑧…❺

美術館だより　NO.114　発行2024年5月27日

安曇野ちひろ美術館
〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　TEL.0261-62-0772　FAX 0261-62-0774